

< 第二部 >

ディスカッション「海外における日本語教育の役割、これからの日本のかわり方を考える」

石井恵理子（東京女子大学現代文化学部准教授）

川上郁雄（早稲田大学大学院日本語教育研究科教授）

八田直美（日本語国際センター専任講師、元 JF バンコク日本文化センター主任講師）

古川嘉子（日本語国際センター専任講師、元 JF ジャカルタ日本文化センター主任講師）

三原龍志（日本語国際センター専任講師、元 JF ソウル日本文化センター主任講師）

ディスカッションでは、海外における日本語教育の役割とこれからのを考える上での二つの視点が提示された。

一つは、日本語教育を実施している当該国の社会のあり方、日本を含む他国と当該国との関係、さらに国際社会の状況など、社会的文脈の中で日本語教育を見る必要性である。もう一つは、グローバル化社会における人の移動を見たとき、日本語教育が多方向性、動態性、越境性という特徴を持つようになってきているということである。

それぞれを考える上でのヒントとなる事例として、バンコクの在留邦人による現地日本人家庭ホームステイプログラムの試み、ポップカルチャーが話題となることで生じる交流の場の存在、日本での中小企業研修の参加者が帰国後日本語教育にかかわるようになった事例、日本を介さずに日本語教育関係者の情報交換を目的として開催された「東南アジア日本語教育サミット」などが紹介された。

そして、海外の日本語教育の今後においては、従来のような資金的、物的、人的支援ではなく、支援の中身を考えることが重要であり、必ずしも教師を介さない、日本を介さない日本語教育の存在、日本語教育とその周辺にいる多様な背景を持つ人々の接点となる「場」の構築、そこでの活動の活性化などに対する質的支援があるのではないかということが確認された。

さらに国内の日本語教育は海外の日本語教育と切り離して見ることができないことから、海外、国内を個々に見るのではなく、双方を見て考えていくことが、日本語教育の今後を模索する上で不可欠であるとまとめられた。